



大阪女学院大学 教員養成センター 平成 26 年 5 月 11 日(土)・12 日(日)

第 2 回「英語の教え方教室」合宿 in 長浜 於：グリーンホテル Yes 長浜

・「ディベート発想の思考力の育成 —論理的に考えるための活動例紹介—」 中井 弘一 (大阪女学院大学)

滋賀県はもとより、京都、大阪、兵庫、奈良、三重、福井の府県から約 40 名の高等学校と中学校の先生方、院生、大学生が集まり、合宿運営幹事長の戸田先生の開会挨拶で始まった。

■ 基調講演

「ディベート発想の思考力の育成 —論理的に考えるための活動例紹介—」

1. はじめに

中井先生の基調講演では、①「なぜ今ディベートを授業に取り入れるべきなのか」という問いかけから始まり、②実際に行われている「高校英語ディベート」についての詳しい説明を頂き、③「ディベートをする上では生徒はどのような力が必要」であり、どのような方法で実際の「授業にディベートの要素を取り込んでいけるか」④ディベートに必要な「論理的な思考」とはどのような内容について、実践活動を交えて、学びました。



2. なぜ、今ディベートを授業に取り入れるべきか？

現代社会においては、以下の2つの力が必要であると説明された。

- ①他者と協同しながら「正解のない問題」に対応する力
- ②生涯にわたって学び続ける力

このような力を学校教育で生徒に習得させるには、従来の知識を習得させるだけの教育では不十分で、学んだ知識を使いこなしたり創造したりする力を育成するという社会的要求に、学校は応えていかなくてはなりません。ディベートは、現代社会の問題を論題として扱っているので、ディベートをすることで、「今勉強していることが、世の中とどう結びついているか」を実際に体験することができる (authentic learning)。これがディベートを授業に取り入れるべき理由であると。

3. 全国高校英語ディベート大会

ディベートには「パラメンタリーディベート」という形式もありますが、高校生には、「全国高校英語ディベート」の方が、流れが明確であるため、理解しやすく高校生には取り組みやすいのではと説明された。

①全国高校英語ディベートの流れ

立論→質疑→アタック→ディフェンス→総括
(論題に対して、肯定側、否定側が交互に行います。)

②言葉の定義

論題で使われている言葉をはじめに定義することで、かみあわない議論を防ぎます。

③立論の論理展開パターン

- (1) 問題解決型議論 (①深刻な問題がある→②現状では解決できない→③解決策の採用)
- (2) 制度廃止型議論 (①制度の意義がない→②制度が弊害を生んでいる→③制度の廃止)
- (3) 比較優位型議論 (①改革案採用→②大きなメリットが得られる→③現状ではメリットは得られない)

④総括について

総括の担当者は試合全体を広い目でまとめます。相手チームの議論、自分チームの議論を比較し、自分たちの議論の強さが上回っていることをその根拠を述べて主張します。

最後に、ディベートにおいて重要なことは、論理であるということです。ですから、普段の授業の中で、教員は大切なポイントに対して、正解を求める一つのことを訊くのではなく、次第に深く焦点を絞るように3段階程度で連続的に尋ねる質問を生徒に行っていく必要があることを力説されました。1つの質問では不十分なのです。一つのことが全体でどういう意味合いを持っているのか、究極の課題は何であるかを生徒に気付かせ、それに応答できる力の育成が望まれます。ディベートの中の質疑の時間を生徒に有効に使わせるためには、まず教員から連続的な発問を投げかけていく姿勢が大切です。

4. 生徒がディベートを行う上でどのような力が必要で、どのように授業に組み入れるか？

①思考力

Input-Intake-Output という指導過程の中の Intake(摂取・内在化)

における生徒が考えるステップが重要であるとおっしゃいました。ここでは、「1分間スピーチ」を紹介され、実際に、「小学校英語の是非」について議論し合う体験をしました。効果的な1分間スピーチでは、疑問→結論→理由の流れで話すことだそうです。

What to think よりも How to think を教えることが、ディベートを行う上では大切で、思考力の育成につながるのです。knowing what に留まるのではなく、knowing why, knowing how を身につけさせることが大切であるとのことでした。

問題意識を生徒に持たせることも大切です。そのために、事例 (Plastic surgery の記事等) を挙げて、考えることを生徒に訴えることが必要なのです。注意すべきことは、物事は見る角度によって違って見えるため、思い込みをしないように気をつけなければいけません。

③論理的な表現をする力

教員が話題に対する語彙を与え、生徒にそれらの語彙を整理させるという活動を授業では行うことができます。まず、論題や問題に対する語彙・知識を豊富に持たないと、論題や問題を読み取れないし、何が一番大切なことなのかを本質的に見つめることはできません。普段の授業でも、レッスンの内容に関連する語彙収集やその語彙の持つ意味をネットワークのように関連づけて説明できるような課題を考えることも有効であるとのことでした。

5. 論理的な思考をするには

STEP 1 : 必要な情報の取り出し (比較する力、分類する力、分析する力)

比較、分類、分析するために、「視座」(どの角度から見るか)、「視野」、「視点」が大切です。朝日新聞朝刊より「2色マーカーで磨く読解力」を引用され、事実をグリーンで、主張はオレンジで文章に線を引く活動を紹介されました。また、ディベートはどこにポイントを持っていくかが大切なので、「自分の観点を持つ」ことが必要だということもおっしゃいました。最後に、比較、分類、分析した後に、どのように説明するかも大きなポイントです。言い方によって、相手に伝わりやすくも伝わりにくくなるからです。

STEP 2 : 得た情報の評価 (評価する力、選択 / 判断する力)

評価、選択、判断するために、どの基準を用いるかが大切で、自分の philosophy を持たなくては行けないということでした。

STEP 3 : 自分の考えの論理を構築 (推論する力、構想する力)

自分の考えを主張するために、最低3つの観点・根拠・理由を持たなければいけません。一つであると、それが反論されて根拠がなくなると主張は意味をなさなくなるからです。

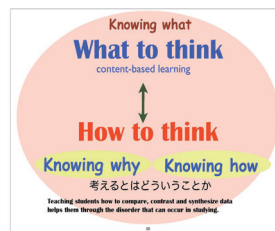
これらのことを、ペア活動などを取り入れながら説明していただきました。

6. 最後に

生徒がディベートを行うためには、論理的な思考力をつけることが必要不可欠であると感じました。中井先生の講演を通して、ディベートについての基礎を学ぶだけでなく、様々な思考力をつける活動を経験させて頂きました。教員にとって、いかに生徒に考えさせ、思考力をつけさせる活動や仕組みを授業の中に組みこんでいくことが大切なのではないでしょうか。

さて、ディベートの基礎を学んだところで、次は本番です。Are you ready to debate?

報告：坂本 美佳 (滋賀県立伊香高等学校)



■ グループ討論①：賛成反対派に分かれて論点整理

グループ①『英語の授業は英語ですべきである』

MC：小財久美（滋賀県立虎姫高等学校：2年目）

AFFの論点は①生徒のモデルになる、②コミュニケーションの場面を設定していくことこそが教師の役目であるということ。②についてはNEGから、正しく英語を話せないし、あいまいな英語による活動に終わってしまうというアタックが出た。

NEGの論点は①日本語と英語は言語構造が大きくことなるので、日本語でしっかり説明すべきだということ。それに対してAFFからは英語で考えるべきで、間違いがあってもコミュニケーション活動をするべきだと反論が出た。

グループ②『小学校英語は中高での英語学習にプラスである』

MC：熊谷向祐（滋賀県立米原高等学校：5年目）

AFFの論点は①英語学習への動機が高まる、②音声やリスニング能力が向上する、③機会均等（全ての小3からすべき）

NEGの論点①現状では指導体制が弱い、②英語を実践使用する場がない、③小中の連携がうまくいっていないであった。

NEGの①指導体制が弱いという意見は、現状の小学校教員の大量採用が原因であり、AFF側は中学校の免許も有する教員が多いので、その人たちがリーダー的になっていると反論した。またNEG②実践場面が少ないという意見に対しては、学校の授業があるので十分と反論。最後に③小中の連携の弱さについては、京都市の具体例が紹介された。具体的な例を出しながら紹介することで、議論は熱くなり、AFF側の方が説得力を増した。

グループ③『英語の授業は予習を必ずすべきである』

MC：小川真加（滋賀県立能登川高等学校：2年目）

AFFの論点は①予習によって授業のスタート地点を合わせることで授業中に何を理解すべきかなどの学習の目標をはっきりさせることができる。②授業は予習でわからないことを共有し、授業で内容を深めることができるという意見。

NEGの論点は①予習よりも復習をするべきだ。なぜかという、予習を前提としての授業では、生徒の学習具合によって差が出るからだ。生徒によって予習の差はでる。②予習は自分ですることによって間違ったことを覚えてしまう恐れがある。③英語の授業では初見で読み、その場で考える力が求められる。MCとしては否定側の意見の方が説得力があった。なぜかという、予習のイメージが人によって違うという意見に賛同できたからである。

グループ④『日本語訳のプリントを配布は必要である』

MC：堀尾美央（滋賀県立米原高等学校：6年目）

AFFの論点は①本文の内容の確認が各学習者で確認ができるので学習が促進される。②和訳の説明に費やす時間が減り、授業の効率が上がり、音読などに時間を使える。③日本語訳を見ることで客観的に英語の学習ができる。

NEGの論点は①和訳プリントを渡さないことで、授業中に緊張感が生まれる。②和訳プリントには意識が多いのでそれにとらわれてしまい、自分の日本語ではだめなのかと不安になる。③和訳プリントを配付するのでなく授業中に和訳をすることで、理解度をクラス全体でやりとりをしながら進めることができ、ついていけない子がいなくなる。

討論が一番白熱したところは、3点ある。1つめは、NEG①集中力や緊張感が生まれるという意見に対して、訳だけではなく、単語や文法の説明でも可能ではないかとAFFから反論出たこと。2つめは、AFF側の和訳を渡すことで、訳をもらえるから、心の余裕が生まれて、授業中の話を聞かなくなるのではないかとという否定側のアタック。3つめは、NEGの意識はダメなのかという議論。AFF側は意識は日本語の勉強になるのでは良いではないか、などピンポン・ディベートが続いた。全体的に和訳は「後渡し」で議論を進めていったので、先渡し、中渡しだったら議論はどのように進んだのか気になる。最後にNEG側が、紙の節約にもなるのではという意見も出て、会場は大きく盛り上がった。



グループ⑤『IT機器の活用は通常授業より効果的である』

MC：音羽顕慈（滋賀県立石部高等学校：3年目）

AFFの論点は、ビジュアル、音、情報などをすぐながせるので情報量が多くて良いという意見だった。それに対し、NEGからは量があれはよいのかという反論がでた。そのAFFの再反論で、the more, the better の一言でNEGの反論は撃沈しました。

NEGの論点は、生身の人間とのコミュニケーションが大切と主張した。ALTの活用、英語教員自身が英語で表現できることが、生徒の意欲を高めるという意見を出した。それでもIT機器のもたらす情報量は多く影響は大きいとAFFが反論した。否定側は情報量のバランスが必要だとさらに反論し、もたらす情報に真実が入っていない場合もあると強調。それに対してAFFは誤った情報を見抜くことも情報化社会では求められていると反論し、議論は延々と続いた。

報告：戸田 行彦（滋賀県立守山中学校）

■ グループ討論②：「みんなで知恵を出し合おう！授業の悩み」

討論②は、5人ずつのグループに分かれ、ディベートよりもディスカッション的な流れで進めました。

<学校教育全般について>

- ・数ある教材を生徒に適合した形で使用するためには、一教師としての堅固な教育観をもち、生徒の人格形成の使命にあふれ、優れた教育環境を構築する前向きな心が重要である。
- ・英語（や授業全般）に劣等感をもっている生徒が多い。少しでも成功体験が増えるよう、授業における質問等のハードルを低くしてその達成度を褒め、モチベーションの向上に繋げられるよう、指導方法を工夫している。
- ・来年度には新学習指導要領で学ぶ高校生が揃う。今後、小学校・中学校・高等学校のそれぞれの教員間のカリキュラム上の共通理解と日頃のコミュニケーションが益々大切になってくるのではないかと。

<英語授業について>

- ・One paragraph, One summary を実践している。学んだ内容を自分の言葉も含めて要約することで、input-output のリズムを体得させ、内容をどれだけ理解しているかを適切に確認できている。
- ・ラウンド制を導入しているが、タスクの解答に終始して時間が過ぎるのではなく、できるだけワークシート上の解答（英語）を声に出す時間の確保に努めている。また、True or False Question の質の向上も図っている。
- ・生徒による発表の時間を十分確保したい思惑から、output 活動に充てる時間をやや増やしている。input の重要性和 input との時間のバランスも考慮していかなければならないと感じている。
- ・授業において何が大切かを見極め、教科書の全 Lesson を見通して、それぞれの授業時間で何が大切かを事前に見いだしておく必要がある。
- ・All English の授業は難しいが、ただ単に「全て英語で押し進める」のではなく、授業の前にまず、生徒の理解可能な部分を精選しておくことが大切である。
- ・ペアになり、教科書で学んだ部分（例えば1ページ）を1分間で考え、30秒で内容を伝えあい、さらにその summary を家庭学習にし、提出されたものをクラス全員で共有している。好評である。
- ・Lesson のそれぞれの One Part でどのように生徒に伝えていくか、アイデアを練っておくようにしている。IT教材も効果的だが、指導内容における input と intake をどのように位置づけるのかも含め、事前に把握しておくことが大切である。

報告：中西 勝弘（滋賀県立八幡高等学校）



■ 参加者記念写真